Interview④ with Currentzis, Teodor

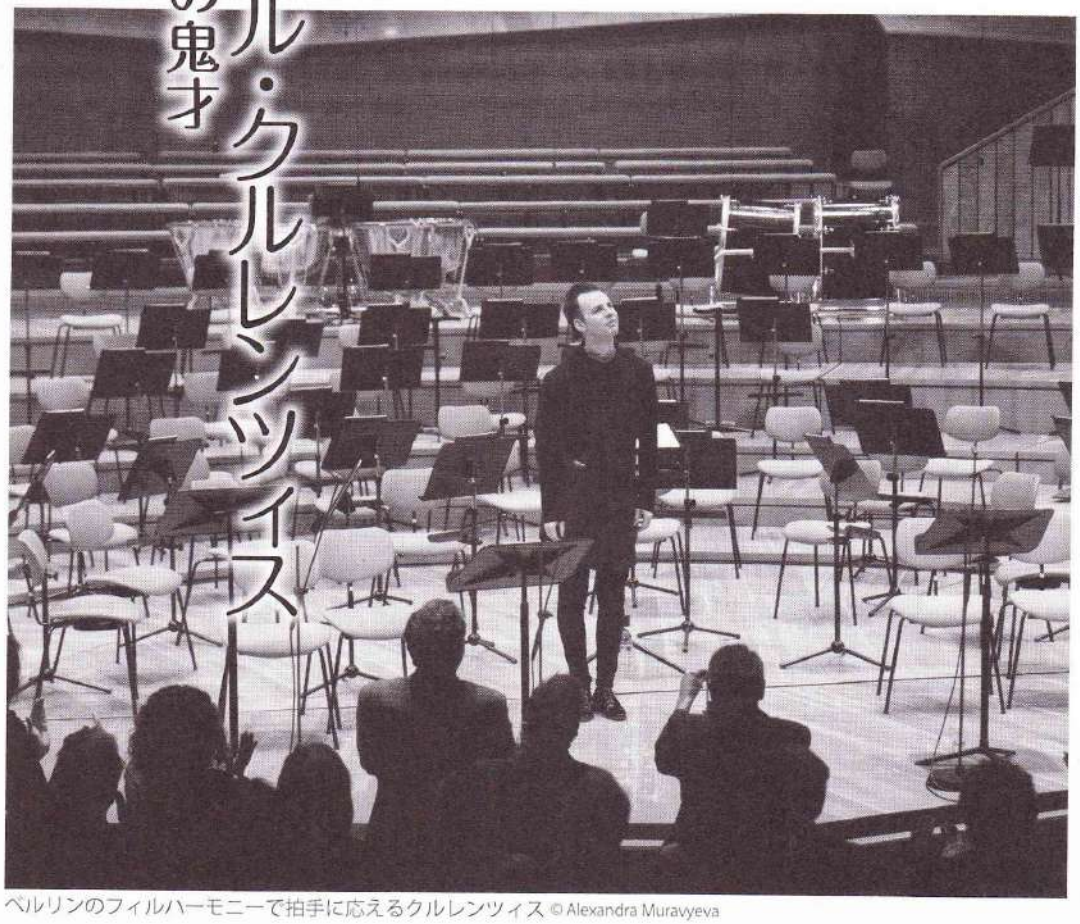
テオドール・クルレンツィス 現代指揮界の鬼才

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka

常に音楽が最優先

「旬の指揮者」となって久しいテオドール・クルレンツィスは、その賛否両論の激しさでも常に旬であり続けている。彼の音楽は旬な時代感覚に訴えかけるために、必要とあれば伝統的奏法もアップデートするため、論争のもとにもなるのだ。彼は「正しい演奏」を求めてはいない。聴衆をより良い人間に成長させるための共感を音楽のミッションと位置づけているのだ。

「まず音楽ありき」の生活を送る彼を牛耳れるのは音楽だけのようだ。今回のインタヴューも約半年前からジリジリと迫り、時期やテーマに合わせて彼のモティヴェイションを上げながら、「2月にルツェルンで!」と約束を取り付けた。レジデンス・オーケストラとして1カ所に留まった形でトータルな視点からの音楽的体験を提供する形態が彼らの念願で、それがこの2月ルツェルンで初めて実現することになっていたのだ。その発表時は初めてのレジデンス活動に期待を膨らませていたが、コロナ第2波ですべてキャンセルとなり、10月に延期された。ぶじ実現すれば、その様子もみなさまにお伝えしたい。その後も機会を狙い続けたが、最終的には「世界で数人の選ばれたジャーナリスト」には2〜3の質問に答えるとの連絡があった。しかし1日、また1日と予定を延ばされて今日にいたっている。それは彼にとっては気まぐれではなく、常に音楽が最優先だからなので、日本の聴衆をないがしろにしているわけでもない。むしろとても大切にしている「世界で数国」に選ばれた日本としては尊重するしかない。



ベルリンのフィルハーモニーで拍手に応えるクルレンツィス © Alexandra Muravyeva

「毎日が旬」の音楽

クルレンツィスは、そのときに取り組んでいる作品に全身全霊をこめて集中力を研ぎ澄ます。新型コロナウイルスが世界を覆った昨年4月、日本では惜しむらくキャンセルとなったベートーヴェン《第九》について、年末の第九シーズンに話してほしいと頼んだときも、「いまの気分は『交響曲第7番』だから、それについて話したい」と返事が来た。当時、準備が整っていたのに発売が延期になっていたそのCDも、4月9日からようやく手に入れることができる。2018年7月31日から8月8日にかけてウィーンのコンツェルトハウス大ホールで録音されたこのCDを聴くと、その直後にザルツブルク音楽祭でベートーヴェンの全交響曲を連日演奏したときの彼らの様子が目に浮かんでくる。いちばん幸福感があふれ出ていたのがこの「第7番」だった。クルレンツィス自身も「一音一音が完全な均斉を保つことに貢献していて、形式的にはすべての交響曲のなかでいちばん完璧だ」と語っているだけある。ムジカエテルナとクルレンツィスは、宗教団体かと思うほどの強い精神的つながりが演奏中にもひしひしと感じられるが、この「第7番」は、それを喜びや楽しさに昇華させ、アクセントを強調するたびに、汗を飛ばしながらいっしょに高揚していくさまは、団体スポーツでのチームワークと達成感を連想させた。そしてそんな視覚的高揚感との相乗効果のためもあるだろ

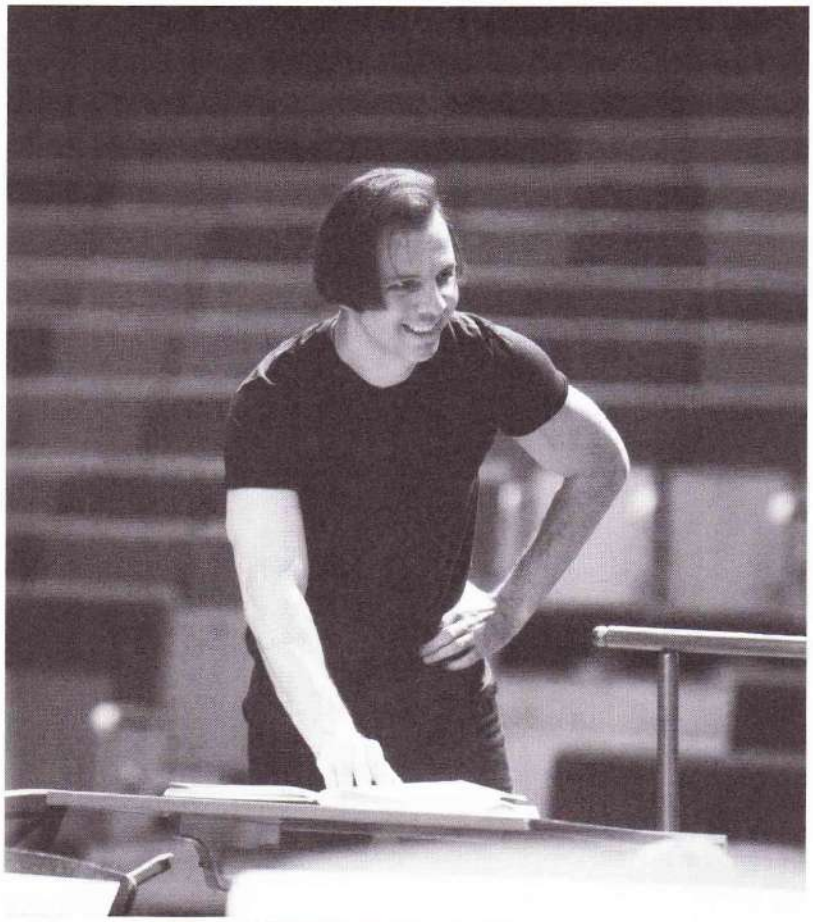
うが、このCDから聴かれる演奏以上にエキサイティングだったのだ。それは録音のあと、ザルツブルク入りしてからも、毎回のリハーサルで、彼らの音楽をより深く掘り下げたからではないだろうか。全交響曲を演奏し終えた数カ月後のインタヴュー時にその偉業を讃えるとクルレンツィスは、「ヒンターホイザー（マルクス、ザルツブルク音楽祭インテンダント）に説得されて承諾したけれど、さすがにヘヴィで、しばらくはもうできないと思う」と、珍しく弱音を吐いた。演奏会当日も、翌日の朝も連日リハーサルを重ね、極限まで追求する彼らのやりかたでは相当のエネルギーを要しただろう。その意味でも彼らの音楽は「毎日が旬」なのである。

音楽はコミュニケーション

その直後SWR交響楽団（南西ドイツ放送交響楽団）の首席指揮者に就任したクルレンツィスは、シュトゥットガルトの聴衆の心もガッチリと掴んだ。演奏会プログラムが終わったあとも、真っ暗な客席のなかに立てられた数本の譜面台の間を、その明かりだけで楽団員が移動しながら現代曲のアンコールを聴かせる試みなどにも聴衆は好奇心で目を輝かせ、まるで彼がディレクターを務めるディアギレフ・フェスティヴァルの地、ペルミのドイツ版のようだ。そのペルミにも、クルレンツィスたちの音楽を日常的に聴きたいという理由から引っ越して来る市民が増えているという。

ルツェルンでも頻繁に演奏するようになり、初来日のあとの2019年4月には、非常に特殊な、祈りのようなヴェルディ「レクイエム」を聴かせた。終演後、クルレンツィスを楽屋に訪ねると、確実な手応えが確信に変わったような顔で、「日本での次のプログラムはこのヴェルレクではどうかなあ？」と聞かれて驚いた。「日本の聴衆は喜ぶと思う」と個人的感想として伝えると、側にいたペルミ国立劇場のトップは「いや、ベートーヴェンで決まっているから」と困った顔をしていたが、そのときのクルレンツィスの心はヴェルディ「レクイエム」で満たされていて、ベートーヴェンの入る余地もなかったのだ。そんな至福のときに日本の聴衆を思い出してくれるのもうれしいことだ。その成功から、翌年には「テオドール」と名づけられた数日間の連続音楽会も企画されていたがコロナ禍でキャンセルとなり、彼の音楽をライヴで聴く機会は当面失われた。

キャンセルが伝えられるたびに彼も落胆はしただろう。しかしクルレンツィスの夢は、「修道院のような場所で、楽団員たちと生活を共にしながら、音楽ざんまいの毎日を送るのが理想だ。そしてそこに聴衆のかたが音楽を聴きに来てくれるような生活が送れたら……」と何度も口にしていた。コロナ禍のロックダウン中にはそれに似た生活を送ったようだ。そして聴衆に聴きに来てもらうために、彼らの活動にアクセスできるオンラインプラットフォームが発表された。「音楽はコミュニケーション」というクルレンツィスにとって、完全隔離生活の孤独な状態にこそ、音楽を通して自分自身とコミュニケーションを取ることが大切だという。そのような生活のなかで蓄え、進化した彼らの音楽が聴ける日が楽しみだ。



いまやこの人の一挙手一投足が音楽界の話題となる ©Alexandra Muravyeva

© Alexandra Muravyeva

テオドール・クルレンツィス
1972年生まれ、ギリシアのアテネ出身。1994年、サンクトペテルブルク音楽院でイリヤ・ムーシンに指揮法を師事。サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団でユーリ・テミルカーノフのアシスタントを務め、2004年、ノヴォルシビスク国立歌劇場の音楽監督に就任、同年アンサンブル・ムジカエテルナおよびムジカエテルナ室内合唱団を創設して芸術監督となる。2011年、ペルミ国立オペラ・バレエ劇場の芸術監督に就任。2018 / 19シーズンから南西ドイツ放送交響楽団の首席指揮者を務める。

■CD
◎ベートーヴェン「交響曲第7番」イ長調
〈演奏〉テオドール・クルレンツィス（指揮）、ムジカエテルナ
[S-SICC30566]